袈裟御前

人物

袈裟御前　又の名阿とま。
衣川　袈裟の母。
遠藤武者盛遠　北面の武士。
渡邊左衛門尉亘　袈裟の良人。
松ケ枝　袈裟の侍女。
楓　衣川の召仕。
兵吾　盛遠の郎黨。
杢作　老いたる番匠。
其他に番匠、仕丁、侍女など數人。

第一場

渡邊橋供養の場

正面に太鼓形の橋、橋の袂に渡邊橋普請場とした標示杭立つ。それに柳の樹をあしらふ。舞臺上手と下手に假屋立ち並び、幔幕を張渡してある。假屋の前に櫻の二本三本。

時は春の末、夕まぐれ。凡て橋供養終へて人散じたる光景。櫻の花、間を置いてひら〳〵と散る。下手の普請小屋の中に大釜を据ゑ、其下に火燃ゆ。番匠ども五六人打興じて居る。そこへ仕丁三人下手より來る。

仕丁一　やれ〳〵濟んだぞ。これで今日の役目も首尾よく濟んどと云ふものぢや。

仕丁二　左樣とも〳〵、幸ひ風もなく日も暖かに、結構な渡り初めでおじやつたわい。

仕丁三　これから悠りと骨休めの振舞ひに有附くのぢや。（小屋の中を見て、）や、お主達は早や始めて居るな。

番匠一　いや最う行列の長さに待ち勞れて、内密でちよつぴり始めた所ぢや。お前方も此處へわせられい。

番匠ども　さアわせられい〳〵。

仕丁一　偖も早い奴等ぢや。

仕丁二三　それでは仲間へ這入ろか。

番匠ども　さア〳〵。

大釜の周りに圓座して、釜の中の白丁を取出し、皆々酒を酌む。盃順々に廻る。

仕丁一　さて〳〵今日の賑ひは厳いことぢやつたの。近年橋供養もつゞく中に、此樣な人出は見ぬことぢやい。

仕丁二　加茂の祭も斯程では有るまい。何さま禁裏からの敕使は立つ、仁和寺の御坊が導師で、緋の衣を着た大衆が渡り初めをすると云ふからに、京洛中の男女が擧つて出たのぢや。それにしてはいかう諍ひもなく、負傷人も出ず、無事に濟んで何よりぢや。

仕丁一　俺は又餘りな人出に、折角架けた橋が今にも如何ぞ成りやせぬかと、大抵心配したことぢやないがな。

番匠一　何を言ふぞい。津の國の番匠が腕に撿をかけて仕上げた仕事ぢや。間違ひが有つて堪ろかい。

仕丁一　何ぢやと。

番匠二　まア〳〵、埒もない喧嘩は止めぬかやい。お奉行樣の耳へでも入つたら事ぢや。

したが、今日のお奉行樣、お歳は若いが物の

裁きもてきぱきして行屆いた方ぢや。

仕丁二　おうさ、あれはの、遠藤武者盛遠とて、高い聲では言はれぬが、院の侍の中でも暴れ者と評判の方ぢや。彼の大きな眼玉で四邊ぎろ〳〵見廻しながら、大薙刀を掻込んで、のそり〳〵歩く姿を見ては蹇も立つて働かうぞ。

仕丁三　ちよと手を明けてでも居ようなら、直様あの怖い眼を怒らして、大音聲に喚かれる。ほんに氣も魂も身に添はぬわ。

番匠二　したが、其お蔭で今日の供養も無事に濟んだ。

仕丁二　そんな物かい、はゝゝゝ。

仕丁三　さア一杯飲め〳〵。

番匠三　時に杢作の姿が見えぬが、何處へ行た。あの酒好きの爺が見えぬぞ。

番匠二　今迄此處に居た筈ぢやが。

番匠一　あれ〳〵　彼處にぼんやり立つて居るわ、憑物が落ちでもした樣に呆けて立つて居るわ。

一人白髮の老番匠、仲間を離れて假屋の外へ出で、腕組みをしながら、ぼんやり橋の上を見詰めて居る。

番匠三　こりや杢作、主や其處に何してぢや。

些と此處へ來て祝ひの酒を飲まぬかやい。

老番匠　（背を向けたまゝ、呟く樣に、）いや、解せぬ事が有るぢや。

番匠三　何が解せぬのぢや。

老番匠答へず。

（假屋の外へ出て、）はて、今日はお主如何かして居るな。あれ程好きな酒も飲まず、何ぼ聲を掛けても返辭をせぬ。

老番匠　（一人言の樣に言ふ。）はて、不思議な事が有るものぢや。今日渡り初めの導師がお通りの前、塵も殘さず清潔に掃いた橋板の上を、二尺に七寸餘りの母子の蛇が、ちよろちよろ、ちよ〳〵と渡つて行く。誰も氣が附かぬ樣ぢやつたが、俺の眼にはちやんと見えたわい。

皆々少時沈默する。

仕丁一　（一人嘲笑うて、）何を言ふのぢや。そりやお主の眼の迷ひぢやろ。

老番匠　眼の迷ひなら眼の迷ひにして置け。此橋には女の執念が祟つて居るに違ひない。此橋にも橋を建てた者の身の上にも、何ぞ間違ひがなければ可いがな。

番匠一　何を言つてるのぢや。此ぼか〳〵とした陽氣なら、蛇も出よ、蟇も出よ、彼の年中土の中を潛つて居る土龍も春と知つて踊り出さうわ。それに何の不思議が有ろかい。

番匠二　いや〳〵待てよ。それに就いては俺も聽き込んだことが有る。今迄緣起でもないと控へて居たが、此橋が出來上ると、左樣ぢや一昨日の朝ぢや、歳の頃は二十四五の女房が此橋から身を投げて死んだといの。

仕丁二　あゝ、其女なら昨日の日暮れ、川下の村から死骸に成つて上つたさうな。何でも腹に五月ばかりの子を抱へて居たと云ふ話ぢや。

仕丁一　して又、其女子が何で死んだ。

仕丁二　俺は知らぬ。

番匠二　俺も知らぬ。

皆々　いや最う鶴龜々々〳〵。

仕丁三　こんな話がお奉行樣に聞えて見ろ、又何んな目に遭はうも知れぬわ。

仕丁一　あれ〳〵噂をすれば影とやら、彼處へ見えるはお奉行樣ぢや。

遠藤武者盛遠、今年十九歳、紺村紺の直垂に黑絲威しの腹卷して、折烏帽子、銀の蛭卷したる薙刀左の脇に挾み、舞臺上手より後ろを顧み膝ちに出で來る。橋の前迄來て、物に躓きたる心持にて振回り、普

請小屋の中をぐつと見込む。仕丁番匠ども盛遠の姿を見て屏風を倒す様に鎮まりたるが、此時假屋の前に並んで、びよこびよこと頭を下げる。盛遠はそれを見たるまゝ、殆ど心にも留らぬ樣子にて、二たび後ろを振返り、一心に上手を見詰めて居る。

それとも知らず袈裟御前、十六歳、下髪に被衣、みやびたる女房の風俗にて、同じ上手より出づ。頭重く惱ましげな風情。

松ケ枝　（手に市女笠を持ち、つか〳〵と後を追うて來たが、）もし上樣え、お前の氣合ひが惡いとて、假屋に休んで御座つた暇に、參詣の衆も大方散つて仕舞うたさうな。いつそ輿に召しますか、それとも最少しおひろひ遊ばすかえ。

袈裟御前　さア、慣れぬ外出に人に醉うて、お前にもいかい苦勞を掛けました。したが、暮れ行く春の野の寂けさ、あれ〳〵櫻の花も散つて居る、いぶせき輿に搖られるより、最些と歩いて見ようわいな。（又そろ〳〵と舞臺前面へかゝる。）

松ケ枝　（其後に隨ひて、）成程、一日一夜垂れ籠めて、坐すお方の偶、外出、ほんに野末の景色も面白かろ、それでは左樣遊ばせや。

盛遠、舞臺後方に突立つたまゝ、眼もて袈裟御前　行く方へ從つた。やがて段々後ろへ退つて、二人の女と入れ代る。

老番匠　（盛遠の傍へ近寄つて、小腰を屈め、）お奉行樣、もしお奉行樣え。何を其樣に見てお坐で遊ばす。見るのは惡い、其樣にして一つ所を見るのは惡い。

盛遠の耳には入らぬ體。

老番匠　な、其樣にして女子を見るものではない。屹度好からぬ事が起りますぞえ、貴方の身にも、女子の身にも。

夕ぐれ塀へ舞ひ下りむとする雲雀の音空に聞ゆ。袈裟御前、思はず足を止めて、空を仰ぎながら靜に踵を廻したが、松ケ枝と顏見合せて、

袈裟御前　ほゝゝ、ほゝゝゝゝ。

松ケ枝　袈裟御前、不圖、盛遠が火の如き眼に自分を見詰めて居るのに氣が附いて、急に笑ひ止む。何か物に怖ぢたる樣に花道の附根迄逃げ行き、わな〳〵と震へて居る。松ケ枝も振向いて、盛遠を見附け、走り寄つて、片手に主を庇はうとする。

袈裟御前　早う輿を、早う。（物言はむとすれど、聲出でず、手を動かすのみ。）

松ケ枝　輿丁の衆、早う〳〵。

輿丁、白木造りの輿を舁き据う。袈裟御前、其輿に乘らうとして簾を上げたが、又盛遠の眼に引かれる樣にして、二三歩戻る。其儘うつとりと成る。

もし、お上樣え。如何なされました。（と、袖を引く。）

袈裟御前　あいなア。（氣が附いて、二たび輿に乘る。）

輿丁、輿を舁いで揭幕に入る。松ケ枝も引添うて走せ行く。

盛遠、たじ〳〵と舞臺眞中へ蹌けて來て、一里先きの物でも見詰める樣に、凝乎と揭幕の方を見込む。

老番匠　（傍へついて來て、）あゝ、危い事ぢや。お止め成されませ〳〵。其樣にして見詰めて居たら、屹度惡い事が起りますぞえ——もし、お願ひで御座りまする。何卒あの方は見ずに置いて下さりませ。爺のお願ひで御座りまする。

盛遠　（不圖、振向いたが、袖を振りちぎつて、か

らりと薙刀を捨てる。釜轉ぶ。）兵吾々々。

雜兵一人（下手より出て跪く。）はゝア。

盛遠（腹卷をかなぐり捨て、）これを其方に預けたぞ。

よろ〳〵と袈裟の後を追うて入る。

老番匠、一旦尻餅をついたが、起上つて、其後を見詰む。日の暮れる心持にて舞臺面次第に暗く成る。

幕

第二場

衣川住家の場

鳥羽の里、衣川住家の體。蘆葺の軒朽ちて、上手に障子を閉め切つた佛間。正面二重には、白地の襖、其前に二枚折の屏風を立てて、爐の釜に湯沸る。下手に網代門。

母衣川、四十八九歳、切下髪、未だ殘んの色香失せやらぬ姥櫻、昔の美しさを思はせる風情、後ろ向きに坐つて、釜の湯加減を見て居る。門前には、一人の托鉢僧、口の中で讀經せる所にて、幕開く。

衣川（讀經の聲に聞耳を立てて、向直りながら、）あゝ、又毎もの托鉢の御出家さうな。どれ、お布施を進ぜませう。（と言ひつゝ、立上つて納戸へ入り、再び初穗を盆に載せて出て來たが、沓脫石の上の庭下駄を穿いて、門の傍へ近寄つた。手頸に數珠を掛けて居る。）

さ、心ばかりのお布施ぢやぞえ。

托鉢僧　歸命頂禮、南無阿彌陀佛。（と誦し終つて、初穗を頭陀袋に受け、鉢の中から衣川の顏を覗き込む樣にしながら、）今日も白河から四條の邊り迄參りまする。何か京へお言傳でも御座らぬかな。

衣川　さいなア、此中娘の便りも聞かぬが、便りのないのは無事な證據。其間文でも認めて置いて、又賴むことに爲ますわいな。

托鉢僧　ほんにお前樣は有德な仁ぢや。當時渡邊黨の中でも美男の聞え高い亘殿を聟に取つて、此方の娘御と二人並べて置いたら、定めて雛の樣であろ。何事も前の世で善根を積まれた應報ぢや。南無阿彌陀佛々々々々々。（花道へかゝつて退場。）

衣川（凝乎と其後姿を見送つて居たが、つと身を引いて、）今日は九月十三日、月こそ違へ、亡くなられた阿とまが父御の逮夜、わが身が彼の子を抱へて奥州から戻つてからも十三年、あゝ思へば早いものぢやなア。どれ、花でも手折つて佛に進ぜましよ。

と、片手に剪刀を執つて、口の中で稱名を唱へながら、庭前の桔梗女郎花など切つて居たが、再び二重へ上り、障子を開けて佛間に入る。其時金色をした佛境が見えて、又障子に隱れる。靜に鉦の音ひゞく。

遠藤武者盛遠（狩衣を着て素足に草履の扮裝、顏色憔悴し、頤鬚少々伸び、思ひ切つたる面持にてばた〳〵と花道を駈けて來たが突然門の扉も破れよとばかり打叩く。）物まう、案内まう。

鉦の音止む。

盛遠　誰ぞ有らぬか。盛遠が參つた。早く出て門を開けられい。

衣川（佛間を出て、訝しげに四邊を見廻しながら、）楓々、楓は居やらぬか。誰やら門に案内が有るぞ。

楓　返辭なし。首を傾げながら庭に降りて門の中より聲を掛く。

衣川　誰ぢや、氣たゝましい、何人ぢや。（盛遠、應へず。そつと扉を細目に開けて、）何人にて坐すぞ。

盛遠、物をも言はず、其扉に手を掛けて押開け、衣川を突除ける樣にして、ぬつと入る。衣川は其扉と一緒に倒れむとして、漸く踏み留まり、此無法な闖入者を眺めて居たが、

衣川　やゝ、其方は盛遠――ま、珍らしい、好うおじやつたな。（と、いそ〳〵近寄らうとして、相手の血相變へた容子に氣が附き、急に怖氣がさして立縮む。）

盛遠　いかにも盛遠ぢや、久し振に伯母御前を見舞ひに參つた。（凝乎と衣川の樣子を見返したが、俄に憤怒の聲荒く。）伯母御前、何故其樣に俺の顏を見詰めてぢや。

衣川　（たじ〳〵として、）さ、何もわざ〳〵和殿の顏を見ると云ふではないが、おゝ、それ、それ、和殿も子供の折には毎日の樣に此處へ來やつて、阿とまとも一緒に遊び暮したものぢやが、おひ〳〵男に成るに附け、院の北面へ出仕する樣に成つては、御宮仕への暇なさ、ふつつり足も途絶えたのに、何と思うて今日のお出――と思うての事ぢやいな。まゝ、其方へ上らつしやいなう。

盛遠　（阿とまの語を聞いて顏色を變へたが、さ有らぬ體に沓脫石の上に登つて、終に腰打掛く。）併し伯母御前には御息災にて何より重疊。

衣川　（遠くから廻る樣にして、二重へ上つて、）和殿も健固で嬉しいわいの。それに此春は又渡邊橋の橋供養に奉行の役を勤めて、いかい名譽の事さうな。阿兄持遠殿にも、草葉の蔭から嘸お喜び――

盛遠　（じり〳〵と向直つて、）渡邊橋の供養のこと、誰から何と聞かれた。

衣川　さ、誰から聞いたとなけれども、それは最う此邊り迄大層な評判ぢやわいな。（二たび盛遠の容子に眼を附けて、）其方、何故其樣に震へてぢや。まア怖らしい眼をして、此伯母を如何する氣ぢや。

盛遠　おゝ、一期の敵、伯母御前の命を貰ふのぢや。（と言ひさま、伯母の小腕取つて捩ぢ伏せ、片手にすらりと腰の刀を抜放つ。）

衣川　（悲鳴を上げて、身を藻掻きながら、）何とし給ふ、盛遠殿。妾のためには和殿は甥、和殿のためには妾は伯母、殊に母御の沒られてからは、此伯母が手鹽に掛けて育てた和殿、親とも子とも思はれよう、恨みを受ける覺えはない。誰が何の樣な讒言して、斯く憂目をば見せたまふぞ。

盛遠　いゝや、他人の讒言でない。今も和御寮の言はれし通り、幼きより阿とまとわれ、野邊に蝶追ひ川に漁りして、共に隈びしことを忘れ給はずば、折に觸れての戯れにも行末は二人を娶合せむずと、伯母御前の口づから宣ひしこと、よも忘れじ。さるに何日の間にやら我を差措き、一門の亘に袈裟をたまひしことぞ心得ね。現在の伯母に欺かれ、可惜女子を人に奪られた。此恨み伯母なりとて親なりとて容赦が成らうや。

衣川　そ、そりや無體ぢや、其恨みは餘りに無體ぢや。和殿が左程執心なりや、何故早う沙汰はしてたもらぬ。老先短い親の身は、一日も早う娘に好い聟取つて、初孫の顏見たいものと、そればつかりに憂身を窶すぞや。少しは子を持つた親の心も酌んでたもいなう。

盛遠　えゝ、親の心おのれが知らうや。盛遠こそは三年が間、われから此家へも遠ざかつて、人知れず心の痛手を包んでは來たものの、先つ頃渡邊橋の供養の日に、久しや、袈裟の姿を見掛けてより、妄執の念二たび燃え立つて、晝とも夜とも分たねば、身は空蟬の脫殼の如く、命は草葉の露も同然、戀には人の死なぬものかは。斯く成り果つるも元はと言

へば誰がためぞ。同じ命を取らるゝなら、伯母御前、和御寮を殺してわれも死ぬわ。（と、衣川の頸髪とつて惹起しながら刃を胸元に擬す。）

衣川　まア〳〵待つて、少時待つてたも。

盛遠　待てとは未練な。

衣川　未練とも言へ、卑怯とも言へ、親一人子一人の袈裟を置いては死にともない。宵してたべ、盛遠殿。（と、手を摺合せて伏拜む。）

盛遠　（凝乎とそれを見て居たが、）すりや、左程に命が惜しいか。

衣川　合點〳〵する。

盛遠　命惜しくば、亘が手から袈裟を取戻して、われに返せ。

衣川　ま、、其様なことが。

盛遠　出來ぬと有らば、それも可い、盛遠一人やみ〳〵と見殺しには爲れまいぞ。

衣川　いえ〳〵、待つてたも。今は是非に及ばぬ、其方の心の晴れる様に爲ようわいな。

盛遠　なに、阿とまをわれに返さうとな。

衣川　今宵袈裟を此家へ喚んで、和殿に會はさう程に、其後は二人で兎に角――兎に角此處を離してたもいの。

盛遠　屹度さうか。（思はず、衣川を捕へた手を放つ。）が、併し後に至つて亘が方へ返り忠など爲さば、和御寮を初め、袈裟、亘、一門殘らず鏖殺しにして、思ひを晴らすが心得たか。

衣川　（身を戰はせながら、）あいなア。

盛遠　うむ、それだに聞違へ給はずば、一命にも及ぶまい。では又夕方に御意得申すぞ。（わざと慈悲なし眼に睨み廻して、舞臺下手より退場。）

衣川　（少時其後を見送つて居たが、）如何せう、如何せう、如何せうぞいなア。

と、泣き沈む。やがて佛間から料紙と硯箱を持つて來て、一字々々考へては書く。やつと認め終ると、も一度讀み直して、吐息を吐きながら、文箱に入れた。手を叩いて侍女を喚ぶ。

衣川　楓々。

女の童　（襖を開けて出て、）召しましたか。

衣川　大儀ながら此文箱を持つて、並の里の亘が邸へ行き、袈裟に手渡ししてたもいなう。構へて何事も言ふまいぞや。

女の童　はアい。（元の襖から退場。）

衣川　（凝乎と一ヶ所を見詰めて居たが、はらはらと落涙して、額を上ぐ。）あゝ、ひよんな事に成つたわいな。いつそ楓を喚び戻さうか――したが、今の盛遠が有様、よも其儘には差措くまい。親の身として、わが子に道ならぬ道の手引をする。一定來世は地獄に墮ちよう。あゝ、如何したら可からうぞいな。（と、身を悶えて泣き伏す。）

稍長き沈默。舞臺次第々々に暗く成る、黄昏の心持。

袈裟御前　（楓と共に急ぎ足で登場、花道の中程に、息切れのする體にて停る。）あゝ、何とやら氣がかりな、心細い文の御消息。母様の身に大事ないかえ。

女の童　いえ〳〵、御案じなさる様では御座りませぬ。

二人綿代門の前迄來る。女の童門の扉を開けて置いて、裏口へ廻る。

袈裟　（門の中に入つて、）母様々々、阿とまが參りました。（と言へど、答へなし。）まア日も暮れたに燈火も點けず、如何なされたことやら。（と、だん〳〵緣鼻に近づく。）

女の童奥より燈火を持つて出づ。

袈裟　（母の倒れて居るのを見て、）まア母様、そこにお坐遊ばしたか。風邪のお心地と承はりましたが、何の様で御座りまするぞえ。

衣川　（半ば身を起して、つく〳〵裳裾の顔を眺めて居たが、はら〳〵と落涙して、）娘か、好う來てたもつた。此母はな、犯せる罪として、なけれども、身に振りかゝる大難に、所詮生きては居られぬわいの。

裳裾　えゝ。（飛び立つ。）

衣川　さ、何も言はずに此刀で、（と、傍の手箱の中から小刀を取出して、わが子の前に置く。）さ、和女の手に懸け此母を思ひ切つて殺してたもいの。

裳裾　（後ろへ下りながら、）まア何としてぞ。母様。お氣でも狂ひしか。阿とまに何で其様な——さゝ、心を落着けて様子を話して下されい、譯を聞かせて下されいなア。

衣川　（袖で顔を蔽うて居たが、）様子と言ふは今朝のこと、何日になく彼の盛遠が訪ねて來て、子どもの折の事を言立て、是非なく裳裾をわれに返せ、さらずば母の命を取ると、刃を胸へ突きつけてのつ引させぬ無理難題。

裳裾　（思はず知らず、）あの遠藤盛遠どの——

衣川　和女、何とか爲やつたか。

裳裾　いゝえ、何とも致しませぬ。（と言へど、心の中には何時ぞやの邂逅が浮んで來る心持。短き間。）それから何と爲されましたえ。

衣川　さ、それぢやに依つて、盛遠の思ひを晴らさせずば、無慈悲な刃に殺されるは一定、さりとて亘が心を破らうではない。いろいろ思ひ惱んだ上、人手に係つて憂目を見むより、切めて和女の手にかゝつて果てようと、思ひ定めて居るのぢやわいなア。（と、裳裾の膝に取縋つて、さめ〴〵と泣く。）

裳裾も暫くは言葉なく、折重つてよゝと泣く。

裳裾　（やう〳〵涙を拂ひ、）母様、最う泣いて下さりますな。阿とまは心を決めました。親のためには、さらぬ孝養もする習ひ。お命に代りまする。緣を結びの神様も、哀れと思し下されませう。

衣川　なに、何と言やる。

裳裾　盛遠殿に會ひますわいな。

衣川　いや〳〵、和女に其様な憂目を見せては、此母が亘殿に面目ない。何卒妾を手に懸けて——

裳裾　えゝ最う、何も何も言うて下さりますな。（と、疊の上に伏沈む。）

ほと〳〵と網代門に案内の音聞ゆ。衣川、そつと頭を擧ぐ。

（門の扉を開けて入りながら、）先刻の約束によつて盛遠が參つた。

衣川　おゝ。（と、飛び上つたが、後ろに裳裾を隱しながら、わな〳〵と戰へて居る。）

盛遠　伯母御前、何と爲された。（づか〳〵と緣の前迄進んで、）なに、そこに居やるは裳裾御前ではないか。（と、二重へ上つて、）幼馴染の盛遠なるわ。なにも、其様に怖がることはない。これへ出ませ、さ、これへ出ませい。（と、矢庭に傍へ寄らうとする。）

衣川　あの、それは——（と、兩手に盛遠を支へようとする。裳裾、袖屏風をして、小鳥の様に慄へて居る。）

盛遠　えゝ、邪魔ひろぐな。（と、拳を上げて打たずむ氣勢。）

裳裾　もし——（と、二人の中へ割つて這入つた。）盛遠どの——（兩膝をとんと突いて、片手に衣川を庇ふ様にしながら、凝乎と盛遠の顔を見上げたが、其眼には決心の色見えて、男に對する恐怖と憎惡とが鬪つて居る。とは云へ、其憎惡は物狂ほしい愛着と壁一重隣りのものである。）

盛遠　おゝ、阿とまか——（と、傍へ寄らうとしたが、女の顔を見ると、何となく其威に打たるゝやうな心持がして寄添ひ得ない。）

袈裟（眼もて盛遠の後を追つたが、見る〳〵緊張した脣のまはりの筋肉が弛む。）おゝおゝ
お――（と、聲を上げて泣伏した。直ぐに又吃と顏を上げて、）阿とまぢや、阿とまで御座んす。其阿とまをお前は何と爲されますぞえ。

盛遠　おゝ知れたこと。此戀かなはずば生きて詮ない盛遠、武士と生れて、弓矢に死ぬるも一定、戀に死ぬるも一定。世の心なしが笑はじ笑へ、和御前を殺してわれも死なうと、疾くより覺悟を定めて來たわ。

袈裟　えゝ。（と、思はず顏を上げたが、又しをしをと差俯向く。）

衣川　（後ろではら〳〵と氣を揉んで居たが、前へ乘出して、）そ、そりや其方何を言ふのぢや。

袈裟　母様、もしッ――（と、衣川を制して、）お前は彼方に居て下されませ。阿とまが好い様に致しまする。な、な。（母を宥めて、佛間へ連れて行く。やがて又懷へ手を差入れたまゝ、しを〳〵と出て來て、やゝ離れた所へ坐る。）

盛遠は始終眼を離さず袈裟の擧動を見詰めたまゝ、何とも言はない。

（顏を上げて見ては、又言出しかねたが、やつと、）もし、盛遠どの。小さい時からお前の氣性、言出しては諾かぬ人と知らぬではなけれども、昔の事を思つたりや、阿とまを哀れとはおぼさぬか。思ひ返して、宥してはたもらぬかいの。

盛遠　なに、哀れと思へ――それは此方で言ふこと。宥せとは、此盛遠に一人死ねと言ふのぢやな。

袈裟　いえ〳〵、左樣ではなけれど、何を言ふにも、われは人妻。

盛遠　えゝ、言ふも無益。其人妻には誰が成つた。斯く成る上は命くらべ、誰彼の容赦が成らうや。和御前が不祥、盛遠が不祥、加へては亘が不祥、三人の不祥が一度に來ると、宿業なれば是非もなや。いづれにしても、三人に一人、所詮生きては居られまい。

袈裟御前、心を据ゑて（返答召されよ。（むつくと立上つた。）

袈裟　えゝ、三人に一人――（と言ひさしたまま、差俯いて物を案ずるさま。やゝ暫くして、）盛遠さま――（間。）お前のお心やうや合點が行きました。

盛遠　合點が行つたとは。

袈裟　かう成り行くも、皆宿世の因果、繫がる緣で御座りませう。阿とまはお心に隨ひまする――したが妾は未だ良人のある身、重きが上の小夜衣、人目を恥づ。褄襲ねはよも爲せまい。盛遠どの、まこと妾を思うてなら、一思ひに、わ――亘を殺して下されいなう。

盛遠　なに、亘を殺せ――とな。

袈裟　今更お前は後れてか。それでは先刻仰有つたのも――

盛遠　おゝ、和御前さへ其心なら、何とて盛遠が後れを取らうや。して、其手段は。

袈裟　其手段は――おゝ、左樣ぢや、妾はこれより家へ戻つて、左衞門尉に髮を洗はせ、酒に醉はせて高殿にそつと寢させて置きませう程に、其滿れた髮を搜つて打つて下さりませ。

盛遠　（躍り上つて、）大願成就。それでは、明日の夜九ッの鐘を合圖に――

袈裟　えゝ――吃度。

遠盛　吃度言葉を番へたぞよ。

袈裟、袂を獨へたまゝ、僅に點頭く。盛遠、沓脫石の上へ飛び下りて、網代門より出て行く。

（佛間より出て、）盛遠は歸つたかえ。ま、

衣川

能う彼の暴れ者が歸つたなう。（と、袈裟の後ろから寄添ひて、心配さうに其顏を見上げる。）

袈裟、立上つたまゝ、盛遠の後影を見送つて居たが、母と顏を見合せて、上から見下しながら、物は言はず、せぐり來る涙にぶる〳〵と身を戰けす體。だん〳〵膝折れようとして、途中から急に衣川へ背を向け聲なく下に伏沈む。

其間、家の裏にある背景の立樹の梢に、夜明けの心持にて、茜色の光射す。

幕

第三場

亘の邸宅

舞臺やゝ下手寄りにまはり緣を廻した殿造りの座敷。庭を距てて、上手に障子を閉切つた高殿が見え、渡廊が兩方を繫ぐ。忰度その渡廊の上邊りに十四夜の月が出て居る。庭前の泉石、すべて中古武家の好み。

渡邊左衞門尉亘（二十三歳、名古屋山三に似たやうな美男子、綾の小袖に袴を着けたばかりで、緣に近い座敷の脇息に凭れ、打寛いだる體にて盃を擧ぐ。袈裟御前、瓶子を取つて、つゝましやかに酌をして居る。火皿の燈火ゆらいで、彼かに二人の面を掠む。

亘（盃を下に置いて、）あゝ、先刻より、何とやら氣がかりな和女の容子、氣分でも勝れぬか、それとも何か心に係る——

袈裟　いえ〳〵、左樣な事は御座りませぬ。

亘　それなら最そつと浮立つて、一つ酒でも過しては如何ぢや。母御の病氣も、案じたとりは事なく濟んで、それも重疊。見やれ、今宵の月かな月を。夫婦の中も彼の樣に缺けたることもないではないか。

袈裟　はい——お心を煩はして濟みませぬ。只——親のいたづきとは云へ、女の身で斷りもなく一夜を外に明した、それさへお咎めもなく、お優しい言葉を聞くに附け、何や彼や案じ過して、つい——

亘　はて、何を詰らぬ。それより如何ぢや、これを一つ和女に上げよ。（と、盃を擧す。）

袈裟（叩頭をして、それを受けた。）妾も今宵は醉ひまする。

盃の獻酬がつゞく。

亘（やゝ酒のまはりたる心持。）それは希代な事ぢや。では、如何であろ、月を看に、一曲所望は出來まいかな。

袈裟（笑顏を見せて點頭きながら）拙い調べも、時の興——

亘（はた〳〵と手を打つて、侍女を喚び寄せ、）奥の間から筑紫琴を取つておじや。

侍女　はアい。（退場。）

亘　和女が我家へ來てから、早や三年、和女と一緒に琴も來たのぢやな。

袈裟　琴も手馴れる、妻も古びる——

亘　はゝゝゝゝ。

袈裟　ほゝゝ。

侍女二人、一面の琴を擁して出で、それを袈裟御前の前に置く。袈裟、それに見入りたるまゝ、急に眞面目な表情と成る。一つづつ琴爪をはめながら、物を案ずる體。やがて絲の音に伴れて、しめやかな唄に成る。

露深き淺茅が原に迷ふ身の
いとゞ闇路に入るぞ悲しき

（急に琴の手を止めて、）もし、人に斬られて死ぬ時は、佛に成らぬと云ふことぢやが、ほん

の事で御座りませうか。

亘　はて、異な事を訊くものぢや。佛に成るか成らぬか、其様なことは女子の云ふものでない。したが、琴の音色も沈み、何うやら手許も情さうな。最早や琴は止めにしやれさ。

袈裟　いえ〳〵、妾は夜すがらでも。

二たび朗詠に伴れて、琴を掻鳴らす。物静かな夜の氣合。其間、亘は脇息に凭れたまゝ、うと〳〵と成る。袈裟は不圖琴の手を止めて、亘の顏を見遣つたが、いよいよ寢入つた様子に、つと琴を押除け膝で擦寄つて、凝乎と五分間餘りも良人の寢顏を見詰めて居る。顏面の筋肉次第に痙攣する様に震へて、怀へ切れずに、わつと聲を出さうとして袖を咬ひ緊めながら伏沈む。

亘　うゝ、其方や如何かしやつたか。（むづ〳〵と動く。）

袈裟、ぎくりとして頭を上げたが、二たびすや〳〵と寢附く様子を見て、胸撫下しながら立つて襖の前へ行く。はた〳〵と手を打つ。

侍女（襖の中にて、）はア――

袈裟（二たび亘の傍へ取つて返して、手を掛けて搖起しながら、）もしツ、夜風も塞う成りました。彼方へ御座つて御寢成されませぬか。

亘　（むつくり起上つて、）あゝ、何時の間にやらうと〳〵寢入つたと見える。夜も深けたか。和女も來やれ、彼方へ參つて寢ると致さう。

袈裟　はい、妾は後から――

亘、足許やゝ危き心持にて、侍女に伴れられて次の間に入る。袈裟は立上つて其後を見送つて居たが、良人の姿が襖の外に隱れると、思はずたじ〳〵として振回り、べつたり亘の坐つて居た茵の上に坐つた。そして、いや〳〵をする様に泣上げながら二たび脇息の上に顏を伏せる。

侍女二人（襖を開けて這入つて、）上様には、未だ御臥み成されませぬか。

袈裟（急に顏を振上げて、）殿様は最う御寢成つたかえ。

侍女　最うお臥み遊ばしました。

袈裟　あゝ、左様か。妾は未だ彼方に用事も有る。それでは後を頼んだぞえ。（緣側へ出て、突當りの渡廊へ通ふ開き戸を入る。）

侍女二人、其後にて、脇息、茵、其他酒宴の器を取片づけ、最後にばた〳〵と雨戸を閉めて行く。それと同時に、上手の高殿にぱつと灯火が點つて、障子に二人の女の影法師が映る。

袈裟（障子の中にて、）あゝこれ、松ケ枝や、一寸待つてたも。又あの蛾が火皿の灯を奪りに來た。左様して置いたら、今に燒死ぬであろ。危い〳〵。早う其障子を開けて逃して遣りやいなう。

松ケ枝　はい〳〵畏まりました。（障子を開けて、蛾を追出さうとする。）

袈裟、片手に濡髮を支へたまゝ、鏡立に向つて坐つて居る。傍に金唐箱の櫛笥を置いて、すべて髮を洗つた後の體。

袈裟（松ケ枝の方を見遣つて、）最う好いわいなア。

松ケ枝　えゝ煩い櫛め。（と、二たび袈裟の後ろへ廻つて、あるじの髮を櫛もて梳き上げながら、）ほんに、上様のお髮は好いお髮ぢや。天然に有るといふ、蘭奢の香りを焚きこめて、中宮様の黄金の冠を被せても、屹度好う似合ひませうぞえ。

袈裟（暫時默したる後、）其方にも好いと見え

るかえ。

松ヶ枝　好い段かいな。したが、夜に入つて、不意に髪をお洗ひなされたのは、如何いふ譯で御座いますぞえ。松ヶ枝には何うも合點が參りませぬ。

袈裟　えゝ。（稍ぎくりしたが、直ぐに又心を落附けて、）おゝ、それ〳〵、今宵は菊月望の夜。此夜若い女子が髪を洗ひ、薄化粧して臥せる時は、一生男に捨てられぬと、昔の譬話にも有るさうぢやわいな。

松ヶ枝　まア左樣かいな。私は又好い歳をして、つひぞ其樣な話も聞きませなんだ。左樣云ふ事なら、紅も白粉も好うつけて、たんと可惜しがつてお貰ひ遊ばせや。さア〳〵、お髪も最う出來ました。つい一寸下へ行て、盥の水を明けて參りまするぞえ。

袈裟　いろ〳〵大儀であつた。したが、其水を明けやつたら、最う此處へは來んでも可い程に、ゆつくり臥んでたもいの。

松ヶ枝　いえ〳〵、最一度參りまする。

袈裟　いゝやいの、和女の來てたもらぬ方が、却て妾の都合が可い。な、な。

松ヶ枝　ま、左樣で御座りましたか。それなれば。最う參じませぬ。御機嫌好うお臥み遊ばせや。（何やら呑込み顔に、襖を開けて降りて行く。）

袈裟　（襖の閉つた後を稍久しく眺めて居たが、又もや後ろ向きに咬り上ぐる體、やがて正面を向くと共に、片袖づつ互みがはりに涙を抑へて、）あゝ、幾たび泣いても返らぬこと——涙に顏を汚しては死顏を見られるのも恥かしい。切めて化粧を仕直して置かうわいな。

二たび鏡立に向つて、紅皿、白粉刷毛など取出して、顏をつくる。其間不圖顏を上げて伸上つたが、物に襲はれる樣にわなわなと身を戰はして思はず手に持つた紅皿を取落す。紅皿鏡の緣に當りて二つに割る。氣が附いて、屹とそれを見遣つたが、だん〳〵其眼を鏡の中に移して、自分の顏が映るのを見ると、又急に飛び立つ。

おゝ、妾を誰に見しようとて顏を粧るのぢや、死顏に化粧して——誰に見せようと云ふのぢや。（稍長き間。）誰でもない、遠藤武者盛遠どの、お前に見せるのぢや。お前でなくて誰が有らう。わしやお前に——身體は上げられぬ。それで——それで、此首を上げるのぢや。お前に殺されるのぢや。（にた〳〵と笑つて、）あゝ、可愛いか、可愛かろ。妾もお前を可惜しう思うて居る——お前を此處に待つて居る、一人寢て待つて居る。お前の足音が次第に此部屋へ近づいて、枕元に立つ迄待つて居る。闇の中に白刃が閃く迄凝乎と眼を開いて待つて居る——

きり〳〵と齒を咬ひしばつて、當處もなく宙宇を見詰めて居たが、ばつたりと疊の上に伏し轉んだ。月の前を怪しげな雲が走つて、草叢に蟲の音すだく。

（やがて又そろ〳〵と頭を擡げた。一時興奮した感情も二たび鎭靜したらしい。）あゝ、妾は矢張良人のために死ぬのぢや。母樣も亘どの、宥して下さい。妾故に數多の人の命にも係はる難儀、それが悲しさに、わが身一つを失ひまする。袈裟をあはれと思召さば、後の世の御回向を偏へに賴みますわいなア。

鐘の音微かに響いて來る。

あゝ、あれは——妾を死出に迎ひの鐘——

障子の枠に縋つてよろ〳〵と立上つたまま、物音に耳でも欹てる樣に、凝乎と庭前を見透して居る。月雲に隱れて庭の面次第に暗く成る。やがて袈裟御前、そろ

そろと障子を閉めて、五寸程に成つてから、ぱつたり閉切つたまゝ、姿を部屋の中に隠す。少時して、ふつと燈火を吹消したる體。

月光再び水の様に輝く。家の中は何處にも燈火の影射さねば、月の光の當らぬ所ば、黒々として物凄い。下手の座敷の檐に釣つた鐵燈籠が急に光を増して、大きな宮守のへばり着いたのが、はつきりと見える。

遠藤武者盛遠、狩衣の上に襷をして、素足、下手屋臺の裏の植込の中から、のつそりと出る。周邊を窺ひ〳〵、力足を踏み堅めて、舞臺中央迄忍び寄つたが、家の蔭を出外れると、全身に眩いばかりの月光に浴びて、驚いて一足退く。今度は縁の上へ這ひ上つたが、角の柱を曲ると、月光の當つて居る縁側を一目散に駈けて、渡廊へつゞく開き戸の蔭へ隠れる。事なく其戸を開けて内側へ這入つた様子。

少時の間、舞臺の上に動くものなし。宮守も依然として動かない。

やがて高殿の中に、「やツ」と云ふ掛聲。と、突然障子を開けて、盛遠の姿が高殿に現はれた。右の手に白刃、左の脇に何やら抱へて居る。一瞬間右視左視して躊つたが、思ひ切つたさまで、高殿の欄干を越えて庭へ飛び降りた。直ぐに立上つて元來た方へ駈出した。が、下手迄駈けて行つて、何と思つたか急に足を留めた。二三歩立戻つて、左の脇に抱へたものを、鐵燈籠の灯影に透して見る。盛遠の顔には驚きの表情が有つた。又、突然駈け戻つて、月光に透して見た。

盛遠

やツ、こりや袈裟が——

盛遠は白刃を取落して、兩手に袈裟の首を抱いたまゝ、大息を吐いた。其儘、地上に尻餅をついた。足摺りをして、自分で自分の腕を敲いた。聲を上げて呻いた。

耳の聲（家の中にて、）やア曲者が這入つたと見えるぞ、者ども、出會へ〳〵。

家の中一時に騒然と成る。

盛遠はそれにも氣が附かぬ様に、身を悶えながら、遣瀬なげに袈裟の死顔へ頬擦をした。

高殿を開き戸から、ばら〳〵ッと物具を着けて、獲物を執つた郎黨が現はれた。盛遠はやつと氣が附いた様に振回つた。急に片膝立てて立上らうとしたが、思ひ返して、袈裟の首を胸に抱いたまゝ、地上に平這つて仕舞つた。

月星雲に掩はれて、舞臺面だん〳〵暗くなる。眞の闇となつた頃、幕靜かに下る。

（大正二年三月十六日）